キルケゴールで読み解く 21 世紀（新連載）

第１回　現師と幻師をめぐる受け取り直し（ゲンテーエルセ）

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

『キルケゴールとアンデルセン』

大学の先輩に芥川賞作家の室井光広氏がいる。といっても４年先輩だから、残念なことに面識はない。同氏は私が入学した1980 年に慶応大学の哲学科を卒業し、私にとっては幻の先輩である。「おどるでく」で 1994 年、第 111 回芥川賞を受賞されている。

2000 年、室井氏は文芸評論『キルケゴールとアンデルセン』を上梓した。この作品は、「アンデルセンについて書かれた最初の本は、キルケゴールが書いた最初の本であった！」という驚きから生まれた著作である。同氏が生まれた東北地方の言葉をヨーロッパに当てはめたとき、まさにそれがデンマーク語になると言う。この本では、デンマーク語をヨーロッパの東北弁に見立て、これらを縦横無尽に絡ませつつ、キルケゴールの思想世界、アンデルセンの文学世界を小気味良く痛快に論じている。機智や言葉遊びがあちこちに散りばめられ、しかも内容も相当に哲学的である。私も面白くて今までに３度読み返した。

キルケゴールは、私の指導教授だった大谷愛人（ひでひと）の専門領域だった。その研究の成果は、いずれも『広辞苑』並みの厚さの浩瀚なキルケゴール研究書５冊にまとめられた。私にとって大学・大学院と、８年間師事した恩師の影響は圧倒的なものだった。今日に至るまで、私もキルケゴールは折に触れて読んできたし、主要な研究書にも少なからず目を通してきた。

室井氏の『キルケゴールとアンデルセン』には、随所に大谷愛人の言葉やエピソードが引かれている。その大半は、私が直接、先生から聞いたものと同じで、室井氏は私と同じ学科だけでなく、大谷ゼミの先輩でもあった！　私はそのように勝手に思い込んでいた。しかし、実のところは、室井氏は大谷教授の「倫理学概論」を１年間受講し、指導教授はフランス哲学の先生についたのである。同氏はそのため、大谷先生を恩師と呼ぶにはあまりに実体がなく、“幻師”と言い習わしている。私にとっては、大谷先生は文字通り“現師”であった。

この著作の中に登場する大谷愛人への言及は、室井氏が実際に聞いたエピソード以外に、そのキルケゴール研究書からのものが多かった。私が同氏をゼミの先輩だと思い込んでしまったのも、もしかしたら、それだけ大谷教授の実際の口調と文章の語調とがほとんど同じものであって、それらが私の頭の中で共鳴しあっていたからなのかもしれない。（私は大谷先生の本を読むと、先生の肉声がそのまま聞こえてくるような錯覚を起こすときがある。）私にとっても、“現師”が“幻師”のように反復されていたのだろうか。

大谷教授は今年（2018 年）の２月初めに逝去された。享年93 歳。後に貴重な蔵書が残されたが、私はご遺族の意を受けて、神奈川県三浦市の御宅まで４カ月間、蔵書整理に通った。先生のキルケゴール研究はデンマーク語文献に基づく基礎研究、文献研究に徹していたので、キルケゴール関係はもとより、デンマークの文学、歴史、哲学、神学などの貴重な書籍が数多くあり、種々の経緯から、結局これらの蔵書類は一括して天理大学附属天理図書館に寄贈されることになった。６月下旬、これらの書籍が図書館に到着したが、その分量は段ボール箱で 80 箱（約 2,000 冊）にも上った。これらの書物の分類・整理の作業も、司書の方の助力をいただきながら、私が責任者となって引き受けることになった。この作業は長期にわたることが予想され、またすべての作業が終わるまでは閲覧はできない。

室井光広『キルケゴールとアンデルセン』講談社

この作業を始めたとき、ふと思い立って、幻の先輩（“幻輩”とも言うべきだろうか）である室井光広氏に連絡を取ってみた。同氏にとっては大学の後輩とはいえ全く未知の人間にも関わらず（こちらも“幻輩”なのかもしれない）、幸いにしてご丁寧な返事をいただくことができ、今では有り難いことに、“幻輩”同士での交誼を結ばせてもらっている。

キルケゴールの受け取り直し（ゲンテーエルセ）に向けて

大谷愛人は若い頃、デンマークに留学して本格的にキルケゴール研究に携わる前、一時期、慶応大学図書館の司書をしていた。室井光広氏もまた、慶応卒業後、ある大学図書館の司書として長年勤務していた。私にとっての“現師”も、そして“現師”を“幻師”として仰ぐ、“幻輩”の室井氏もそうだったように、いま私自身が“現師＝幻師”の蔵書の分類や整理に取り組んでいることに、なにか不思議なめぐりあわせのようなものを感じている。“現師＝幻師”と“幻輩”の輪の中で、自分が新たにキルケゴールの思想を受け取り直し（ゲンテーエルセ）するよう行うように促されている気がするのである。

ゲンテーエルセ Gjentagelse とは「反復」とも訳され、この訳語はキルケゴールの同名の著作のタイトルにもなっている。しかし、ゲンテーエルセは単なる繰り返しの意味での反復ということではない。それは受け取り直すこと、あらためて受け取ること、やり直すことという含意がある。キルケゴールの著作の「反復（ゲンテーエルセ）」も、過去を未来に向けて“受け取り直し（ゲンテーエルセ）”することが可能なのか、そもそも人生には“やり直し（ゲンテーエルセ）”があり得るものなのかというのが、実はその本質的なテーマなのである。

21 世紀も 20 年近くが過ぎた今、19 世紀の思想家キルケゴールはどのように再読解（ゲンテーエルセ）されうるだろうか。感性的な享楽、理性的な懐疑、信仰的な絶望について、彼は思想としてそれぞれ極限まで考え、これらを偽名著作の形を通じて弁証法的に交錯させて突き詰めた。思想史的には、彼は実存主義の祖として位置付けられている。しかし、彼はこの枠組みを乗り越える使信を携え、21 世紀を生きる我々に訴えて、語りかけてくる。その使信とは何か、求められるのは彼、キルケゴールの語りかけを我々の言葉で読み解くことである。

前置きばかりが長くなった。でも気にしないことにしておこう。キルケゴールにも、前置き＝序文 Forord ばかりを８つも連ねた、文字通り『序文ばかり』という著作もあるわけだから。